

導入：イースターの喜びをもう一度

みなさんおはようございます。先週、私はインフルエンザにかかってしまいまして、教会の礼拝をお休みしなければなりませんでした。お祈りに覚えてくださったみなさんに、この場を借りてお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。おかげさまで、こうして今日講壇に立つことが許されました。そして本当に健康が与えられているというのは、恵みなんだと実感しました。決して当たり前のことではない、神様の恵みなのです。

先週は、イエス・キリストの復活を祝うイースター礼拝でもありました。イエス様が、死を打ち破って墓から出られたことをお祝いするというその時に、自分が床に伏せていなければならないというのは、私にとって何とも言えない新しい体験でした。喜びを分かち合う、この日にこそ、教会に行き、みなさんと礼拝を捧げたかったと思いました。しかし、またですね。今、ベットから出られない、このような私のためにも、主は死の力を打ち破って、よみがえってくださったのだと教えられました。

今回、私はまだ、たった数日の間、インフルエンザのゆえにベットから出られなかっただけでした。しかしこれから何十年もすれば、事情は変わってくるでしょう。いつかこの肉の身体は衰え、過ぎ去ります。回復するまでのたった数日の辛抱が、数カ月とか、数年となり、やがては病の床から立ち上がることのできない日が来ます。

しかしそんな私たちにも、イエス・キリストにあって、復活の希望が与えられているということは、なんと希望、なんと恵みでしょう。主イエス・キリストの十字架の死が、自分の為であったと、認め、悔い改めるとき、私たちはその死に与るだけでなく、キリストの復活にも与るのです。私たちは「死」で終わるのではない。それが聖書の力強い約束です。愛するみなさん。主イエス・キリストの復活は、神の御業です。不可能を可能にすることができる、ただお一人の、唯一の真の神さまがなされた、私たちに希望を与える、素晴らしい、御業です！

序論：復活は、イエスにおいても、私たちにおいても真理である

今日のみことばの8節に、こういうフレーズがあります。「それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。」イースターの復活もまさにそうですね。死からの復活が主イエスにおいて真理であったように、神様は私たちにおいても、それを（＝死からの復活を）、真理にしてくださっています。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」（ヨハネ11：25）と、主イエス・キリストは言われました。そして、私たちをその真理に招いておられます。あなたは、この御言葉の真理に生きたいと願いますか？

今朝、この礼拝に来てくださったみなさんを、イエス・キリストは愛し、そして招いてくださっています。「自分がどこへ行くのか分からないような」暗闇の中を、私たちはかつて歩んでいました。しかし、私たちのために御自分のいのちを差し出してくださったお方が、それほどまでに私たちのことを愛していただいている主イエス・キリストが、私たちの光となってくださいました。今朝も、そのお方のいのちの言葉である聖書に聴いて参りましょう。

本論①：新しい命令＝ヨハネが示そうとしている真理

イースターに因んで、「復活」が、「イエスにおいても、私たちにおいても」真理であることを述べました。しかし今朝のみことばは「復活」について語っている箇所ではありません。ヨハネは、この箇所で、いったい何が、「イエスにおいて」、そして「あなたがたにおいて」真理であると述べているのでしょうか。

もう一度、ヨハネが何と言っていたかを8節で確認してみましょう。ヨハネは「それは」と言っています。「それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。」ここでヨハネが言っている「それ」とは何でしょうか。直前で、ヨハネは「それを新しい命令として書いている」と言っています。「新しい命令」として、これからヨハネが書こうとしていること、それが「イエスにおいても、私たちににおいても」、変わることもない真理であることをヨハネは示そうとしています。

ではまず、ヨハネの言っている「新しい命令」について確認していきましょう。

本論①—1：新しい命令① 信仰者の歩みである

まず押さえておきたいのは、「新しい命令に生きることは、信仰者の＝クリスチャンの歩みである」ということです。6節をお読みします。「6 神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません」。ここに「神のうちにとどまっていると言う人は、」とあります。また、4節を見てください。そこには「神を知ってると言いながら」とあります。

このような文脈の中で、ヨハネは「新しい命令」について記していこうとしています。「神を知っているとか」「神のうちにとどまっていると言う人」たちに対して、ヨハネは、「もう一度、あなたがたに書いている」と語っているわけです。それは、神を信じる者、そしてキリストを信じる私たちにへと向けられているメッセージです。神様を信じたい、神様の恵みを受けたいと願っているならば、その人は自分自身を顧みつつ、真摯に耳を傾けなければなりません。

そしてヨハネは、そういう人たちに向けて、「イエスが歩まれたように歩まなければならない」と言いました。これはある意味当たり前のことです。神を信じ、イエス・キリストを信じている人であれば誰も反対しない明白なところからヨハネは説明を始めています。

ところが実際には、そのように歩めていない人たちがいました。「愛する者たち」と7節で呼びかけながら、ヨハネはこのことを指摘していきます。ヨハネが語ろうとしている「新しい命令」は、信仰者であれば当然守っていてしかるべきことですが、実際にはそうならないという状況が当時の教会の中に生まれはじめていました。

「イエスが歩まれたように歩まなければなりません」。分かっている、そのとおりにできない現実、普段から私たちが経験しているところでもあります。私たちも、ときにはこの言葉の前に立ち止まって、自分自身を見つめてみる必要があります。そして、神様のみことばに真摯に耳を傾けるならば、神様は必ず祝福をもって応えてくださいます。

本論①—2：新しい命令② 実は、古い命令でもある

次に、7節でヨハネが説明しているのは、「新しい命令」と言っているが、実は古くからある、そしてすでに聞いている命令だということです。7節をお読みします。「7 愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。」

「古い命令」というものが急に出てきました。それが何を指しているのかが分からないと、ピンと来ないですね。手紙の差出人であるヨハネと、手紙の読者との間で自明なことなのでいちいち説明されていないのかもしれませんが。ここに出てきた「古い命令」とは、「モーセの律法」つまり「旧約聖書」に書かれている教えのことだと考えていただければよいと思います。ユダヤ人にすれば、それは子どもの頃から慣れ親しんできた教えです。

私たちが今手にしている聖書は、前半の「旧約聖書」と後ろの方の「新約聖書」に分かれています。はじめて聖書に触れる方がよく勘違いされることですが、「旧約」とか「新約」というのは、「旧い翻訳」と

か「新しい翻訳」という意味ではないんですね。よく見ると「約」の字が違ってきます。これは正しくは「古い契約」と「新しい契約」という意味です。契約は、もっと簡単に約束と言い換えてもいいかもしれませんが。ですから、神様と人間との間の古い契約、約束の書が「旧約聖書」であり、神様と人間との間の新しい契約、約束の書が「新約聖書」なのです。

ヨハネは、その旧約聖書にも記されていた「古い命令」を「新しい命令として」もう一度、今、手紙を読む人たちに向けて書こうとしています。なぜでしょうか。また、なぜ、古い契約である旧約聖書だけでなく、私たちには新しい契約である新約聖書も与えられているのでしょうか。

結論から言えば、それは、だれ一人として、旧約聖書に記された神様の約束を守ることができなかったからです。これを守るなら、必ず祝福を受けると神様が語られた約束を、人は守ることができませんでした。聖い神様の目に適うほどに守り通せる人はいなかったのです。そんな人間には、神様との間を取り持ち、仲介するメシア＝救い主が必要だと、神様はお考えになりました。そして実際に、救い主となるメシアを私たちのために送ってくださいました。それが、イエス・キリストです。

新約聖書には、メシアであるイエス・キリストのご生涯と、イエス様が教えてくださった教えが記されています。そこには、旧約聖書と全く異なる新しいことが書かれているわけではありません。イエス・キリスト、この方こそが、旧約聖書に記されていた、私たち人間にあたえられたメシアであるという真実に照らしたときに見えてくる、新しい地平、新しい景色が記されています。イエス・キリストという、新約聖書の光に照らしたときに、旧約聖書のみことばは、はっきりと私たちに神様のみこころを伝えてくれるのです。旧約聖書で神様が一番伝えなかった肝心なところを、神様はもう一度、新約聖書という形で、私たちに示してくださいました。

その一番大切なこと、そして、旧約聖書の肝ともいえる一番大切な「戒め」＝「命令」について、ヨハネはイエス様から教えられ、目が開かれました。この分厚い聖書がですね、いったい何のために記され、何のために書かれたのか。神様が最も人間に期待していることは何なのか、それをはっきりと教えてくれたのがイエス様でした。旧約聖書の時代から変わることはない真理として、イエス様はそれを明らかにしてくれました。またイエス様ご自身もその真理に立って歩かれました。だから、私たちも「イエスが歩まれたように歩まなければならない」のです。また、ヨハネが言うように、「それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理」なのです。そして幸いなことに、私たちはどこへ行くのか分からないような闇の中を、もはや歩く必要はありません。「闇が消え去り、(イエス・キリストという)まことの光がすでに輝いているからです。」

本論①-3：新しい命令③ 自分の兄弟を愛すること

それでは、イエス様が教えてくれた一番大切な戒め＝旧約聖書の中にも記されている最も大切な命令とは何だったのでしょか。

イエス様がそのことについて教えてくださっている箇所が新約聖書の中にあります。マタイ22章です。その箇所(マタイ22:36から)をお読みしましょう。あるとき、律法の専門家がイエス様に尋ねました。

『先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか』イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性をつくして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。(マタイ22:36~40)。神様を愛し、隣人を愛すること。これが旧約聖書が教えている中心的なことからです。

聖書の別の箇所でも、「律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つの言葉で全うされるのです。」(ガラテヤ5:14)とされています。

また、イエス様は、弟子たちに向けて「私はあなたがたに新しい戒めを与えます。」と語られたことがありました。そう言ってイエス様が続けられた言葉は、「互いに愛し合いなさい。」という言葉でした（ヨハネ13：34）。「互いに愛し合うこと」、それがイエス様与えられた新しい命令です。初めから持っていた、そしてすでに聞いていた古くて、新しい命令です。

今日の箇所最後の3節、すなわち、9節から11節でヨハネが、「兄弟を愛している人は光の中にとどまっています」、「兄弟を憎んでいる人は闇の中にいる」といっているのは、イエス様の、この命令を意識したものです。ただ、特に「自分の兄弟を愛する」という点が強調されています。それはこの手紙を書き送った人々の間に、「自分は光の中にいる」、「神様を知っている」と言いながら、兄弟を憎むような人たちがいたからだと考えられています。その人たちは、神を知る知識が大事なのであって、それ以外のことは些末なことにすぎないとする、知識に偏った教えを信じる人たちでした。そして、他の人よりも自分は神さまをよく知っていると誇り、兄弟たちを蔑むような人たちでもありました。

ヨハネは、そういう教えが間違いであることを、彼らが自分の兄弟を愛しているのかどうかという点で見分けられるのだと言っているわけです。そういう人たちは、自分は物事をよく知っていると自慢していましたが、実際には暗闇の中を歩んでいるにすぎないのだと、そうヨハネは忠告しているのです。

兄弟を愛することももちろん大切です。しかし、今朝、私たちは、その点だけではなく、イエス様が教えてくださった2つの戒め、すなわち『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性をつくして、あなたの神、主を愛しなさい。』と、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という命令にも心を留めたいと思います。私は、神様を愛し、隣人を愛しているだろうか、そして自分の兄弟をちゃんと愛しているだろうか、これが今朝私たちが自分自身に問いかけてみるべき問いであります。

結論：まことの光はすでに輝ている

「新しい命令」ということについて、今朝はいくつかの点について見てきました。最後に、今朝のこの箇所から、みなさんにお伝えしたいと考えさせられたことについて、語っていききたいと思います。

結論①：すべての愛は神から始まっている

まず第一にお伝えしたいのは、「私たちが愛する前に、神様が私たちを愛していてくださる」ということです。神様は、私たちに「神を愛するように」、「隣人を愛するように」そして、「互いに愛し合うように」という命令を与えられ、私たちがそうすることを期待しておられます。

神様が、私たちに神を愛するようにと期待しておられるのは、まずもって神様が私たちのことを愛していてくださるからに他なりません。神様が、私たちに隣人を愛するようにと期待しておられるのは、その隣人のことを神様が愛しておられるからです。聖書が私たちに「愛」を説くのは、その前提に、その大前提に、神様がまず私たちをこのうえもなく愛していてくださるという事実があるからです。

そもそも人間は、神に愛される存在として造られました。私も、今日この礼拝にこられたみなさんも、またみなさんの隣に、前後に座っておられる方々も、その一人一人を神様は愛しておられます。もしあなたが、神様の悲しまれる罪の道を歩んでいたとしても、ここでヨハネが語っている闇の中を歩んでいるとしても、神様の愛は変わらずあなたに向けられています。神様はいつもあなたのその罪を赦したいと願っておられ、あなたが光であるお方のもとへとやって来ることを待ってくださっています。

みなさんは、「それではこれからは互いに愛しあっていきましょう」と言われて、そうできるでしょうか。実際に、あの人を愛し、この人を愛していくということが、そんなに簡単にできるのでしょうか。人を愛するという事は本当に難しいことです。

聖書が愛について教えている箇所があります。1コリント13：4以下をお読みします。「愛は寛容であ

り、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。」(Iコリント13:4-7) こんな愛を誰が持っているのでしょうか？この1週間、誰かを妬んだりしたことはありませんでしたか？誰かに苛立ってしまったことはなかったでしょうか。ある人のために耐え忍ぶことをよしとできたでしょうか。また、あなたは信じ切れることはできたでしょうか。残念ながら、こういう愛を、私たちは持っていません。喜んでこんな風に人を愛することが私たちは出来ないのです。

しかし、そんな私たちでも誰かのことを愛する思いで、心が満たされるときがあります。それは、私たちが本当に愛されていると知ったときです。神の愛を知ったとき、神に如何に深く愛されているかということが分かったとき、神様の愛に満たされたとき、人は変わります。その人の心には喜びが与えられ、人を愛する力が新たにあたえられるからです。神様との愛の交わりに生きるとき、その人は新しい命に生きています。たとえ何かを耐え忍ばなければならないとしても、たとえ何かを犠牲にしなければならないとしても、喜んでそれを行うことができるように、神様が私たちを変えてくださいます。

イエス様ががそうでした。愛するみなさん、私たちの主イエス・キリストは、自ら進んで十字架にかけられたお方です。聖書がそう語っています。「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。」(ヘブル12:2-3)

主は私たちのために耐え忍ばれました。だから私たちも主のために耐え忍ぶことができます。みなさん、神様は私たちのことを本当に愛してくださるお方です。それが分かったとき、私たちは神様を愛することができます、誰かを愛することができるようになるのです。

結論②：神の愛に生きるとき、そこにいのちがある

お伝えしたいことの第二は、「神の愛に生きるときに、そこにいのちある」ということです。神様が自分のことを本当に愛してくださると知ることは、私たちのすべてを変える力があります。

思春期を迎えると、人は「自分が何者であるか」ということに敏感になります。あるホームページを見ていたら、「思春期の子どもの大切な課題は、健全な自己概念、アイデンティティを形成することです。」と解説されていました。自分がどんな人間なのか、いろいろな経験を通して、現実と折り合いがつかないまま、思春期の子供というのはどこかあぶなっかしさを抱えながら、苦しんだりします。だんだんと自分がどんな人間であるかを受け入れていくことで、大人になっていきます。そして、自分をどんな人間であるか考えるかは、その人の人格形成に大きな影響を与えます。

神の愛を知る、神様が自分のことを愛してくださるという事実が目が開かれるのは、私たちのアイデンティティを根底から覆します。だから力があります。クリスチャンのアイデンティティとは何でしょうか？キリスト者が抱くべき自己理解とはどのようなもののでしょうか？それは、「神様は、私を愛してくださっている」ということです。それが事実であるという確信です。キリスト者は他の何を疑っても、どんなことに揺らいでしまっても、「神が私を愛してくださっている」という一点においては堅く立たされているものです。サタンは、攻撃してきます。「お前は神に愛されるほど立派な人間ではない。」「お前ほど愛の足りない者はいない。」「お前のしたことは取り返しがつかない。」「神はおまえを愛していない。」悪魔がそうやって攻撃してくるのは、「神が愛してくださっている」ということがクリスチャンのアイデンティティだからです。そこさえつき崩すことができれば、クリスチャンはもはやクリスチャン

ではなくなるからです。

ヨハネは、今日の箇所です。「闇」という言葉が何度か使っていますが、「闇」というのはどういう状態のことか分かるでしょうか。本当の「闇」とは、神の愛を知らないでいるということです。神様が、自分のことを愛してくださると分からずにいる状態、それが「闇」の中にいるということです。

愛に生きることはそう簡単なことではないことがあります。ときには辛いことや、耐え忍ばなければならないこともあります。しかし、この世のものではない天の喜びを与えてくれるものは、愛をおいて他にはありません。神が私の全存在を支えてくださる。そのことを知ったときの平安と喜びは、私たちのあり方そのものを変えます。神様は愛を通して働かれます。神は愛だからです。愛だけが、人を本当に励まし、人に力を与えることができます。その喜びは、私たちのいのちです。神の愛に答えて生きるとき、そこにいのちが通い、神の霊が注がれます。枯れることのない命の泉が、その心の内側から湧き上がるのです。

結論③：教会の一致は愛に支えられている

そして、最後に、キリストのからだである教会の一致について、少しだけ触れておきたいと思います。私たちは、信仰や信条において、あるいはものの考え方や、取り組み方において、一致しようと努めます。しかし、愛において互いに結ばれているならば、私たちは何も心配することはありません。「自分の兄弟を愛している人は光の中にとどまり、その人のうちにはつまずきがありません。」(10節)とみことばも語っています。

神様の愛に支えられて、兄弟を愛していくなら、私たちは光の中にとどまっています。神に背を向けて、いや神の愛に背を向けて暗闇の中を歩んでいた私たちに、十字架においていのちを注ぎだして、神の愛を伝えてくださったキリストが、私たち教会の頭となって、私たちを一つに結び合わせてくださいます。

教会は面白いところです。うちの教会は比較的、人生経験豊かな方々が多いですが、年代も、性別も、性格も、育った環境も、社会的な地位も違った人たちが集うところです。そういうもので私たちは一つに集まっているわけではない、不思議な集団です。そんな全然違う人たちが、それぞれの個性を無にして、歯を食いしばって一緒にやっているわけではありません。ただ、一人一人が同じ神様に会い、同じ神様に愛されていることを経験し、同じ神様を信じ、同じ神様に生かされて、互いに愛し合うべき兄弟姉妹のもとに導かれているのです。

真の光であるキリストがすでに私たち一人一人の人生を照らし、この教会の上にもぶしく輝いてくださっています。イエス様はきっと言われるでしょう。「神を愛し、隣人を愛し、兄弟を姉妹を愛しなさい。なぜならわたしはあなたがたを愛しているし、あなたがたは神に愛されてるのだから。」と。

お祈りしましょう。